

小幡優人

今敏監督のアニメ作品における虚構の使い方とその意味

要約

「虚構と現実」をテーマにした作品はストーリーを通して虚構と現実の境界線やその関係性を描き、小説、映画、アニメなど媒体を問わず数多く存在している。日本のアニメ監督・今敏はこのテーマを扱い国内外で高い評価を受けている。本研究では、今敏の「虚構と現実」というテーマの使い方、作品への落とし込み方について着目した。今敏作品、および今敏自身について分析し、今敏は作品を制作する上でどのような狙いをもって「虚構と現実」というテーマを用いて、どのような効果が生まれているのかを明らかにした。

今敏による『PERFECT BLUE』、『千年女優』、『東京ゴッドファーザーズ』、『パプリカ』の4作品と、全13話からなるTVアニメシリーズ『妄想代理人』の計5作品を検討対象として、今敏のブログなどからその意図を考察した。

その結果、計5作品のほとんどでキャラクターの心理的な描写の際に「虚構」を用いた演出がなされ、キャラクターの感情を強調したり、観客にも味わわせたりするという効果があることが明らかになった。また、今敏作品では「虚構と現実」というテーマを用いることによって、社会が抱える問題に切り込んだり、さまざまな問いを投げかけたりと、社会的メッセージを作品に込めていた事実を確認することができた。